


 ざいそう

コンクリートと私

澁川 雄二郎



民主党のスローガン“コンクリートから人へ”，年が明けてから何度も目にし、耳にしたことでしょうか、建設業に携わってきた私に取っては、何とも無意義な響きに聞こえたものです。本来コンクリートは<人の役に立つ道路、トンネル、橋梁、上下水道等の生活基盤となる社会資本>を担ってきた物です。そのコンクリートと私の出会いは、1971年にゼネコンに入社、TBMで掘削する水路トンネルの現場に配属されてから始まりました。当時のトンネル覆工コンクリートは、エアー（プレス）クリートという名称の円筒形の回転ドラムを台車に乗せた機械を、バッテリーカーで牽引して坑外のプラントから坑内のセントルまで運搬し、打設箇所までエアーホースを繋ぎ、ドラムの回転とエアー圧力の調整でコンクリートを鋼製セントル内に圧送して打設を行うものでした。その圧送距離は概ね20m前後であったと思います（今日使用しているコンクリートポンプでは100～500m程度）。従って長距離を送る時や最終詰め時の充填時には圧力不足となり、配管の途中に追加したエアーブーストで応援のエアーを送りようやく完了させることができました。この詰め充填時に発生する“ドーンドーン”と弾かれる感じの大きな音は非常に緊張する一瞬であったことが鮮明に思い出されます。打設作業の方法は、作業員がセントルの中に入り、天端に配管した先端のゴムホースを振回しながらコンクリートを流し込み、打ち上がりに応じて配管の切替えとホースの付替えを行います。配管はコンクリート圧送圧で暴れないように支保工等にしっかり固定し、ホースは作業員がロープ等でしっかり掴んでおく必要がありました。当時のセントルは検査窓が少なかった為、コンクリートの締固めは、狭いセントルの中に作業員が入り重量のあるエアー式バイブレーター（現在は軽い電動式バイブレーターが一般的）を振回しながら作業を行ったものです。これらの作業は巻厚内の狭い作業空間で、コンクリート硬化熱による高温環境下で、しかも一回の運搬打設量が6m³程度と少ない為に長時間作業となり、トンネル作業の中でも一番の苦渋作業であった事が思い出されます。トンネル作業は切羽の作業員が花形とされ、覆工に従事する人は後向き作業員と言われ年配の人や若年者が多く、切羽作業に比べて重労働である割りに低

収入であることをよく同情したものでした。

1999年頃、新幹線トンネルの覆工コンクリートの剥落事故等が大きな問題になりました。当時マスコミは、この剥落はウエス・木屑（当時の妻板や漏止め材）が出てきた手抜き工事では？等、毎日のように報道していましたが覆工コンクリートに関わった我々には“冗談じゃない！ 当時の機械・設備・技術で精一杯の仕事をした結果である”と声を大に言いたいものでした。とかくマスコミは大衆受けを狙うためか、建設業を“談合だ、手抜きだ”と大騒ぎして悪者扱いにすることが多く、その背景や原因を掘下げ、対策を取上げない傾向があるように感じました。その時からマスコミ報道は一部<眉つばもの>として聞くようにしています。このような事を経験した後、6年程前に当社創業社長（一昨年ご逝去）との出会いがご縁で現会社に入社しました。その故人の思い出の一つに仕事の片手間に書かれた“人の心に花一杯・60歳を過ぎてからが本当の青春”という著書があります。内容は故人が仕事に関わったゼネコンの偏屈なトンネル所長さん等との交流を綴った、酒飲みと女性とのチョット下品なお話です。その中で昔のトンネル屋さんは大酒を飲み羽目を外す事があっても仕事に対する気魄があり、難局になった時程その気魄が伝わった事、常に現場を見て戦う姿勢を持っていた事に対しての感嘆と、最近のトンネル屋さんについては、コンピューターの進歩から、現場監理を事務所でモニターとデーターを見ることで行い直接現場を見る事が少なくなった事を嘆かれています。私が思うに<現場重視>はトンネル現場の基本で、自分達が行った成功例や失敗例等の経験を次に活かす事が技術向上に繋がり、また作業員との交流が人として豊かな感受性を得る事になると考えます。今日のようなパソコン監理では決して現場の細かな技術・施工方法は取得できない事、また作業員の苦勞も分からない事をパソコン音痴の年代として苦言しつつ、残りの人生<60歳を過ぎてから本当の青春>を胸に、よりよい覆工コンクリートを後世に残すため、出会いを大切に仕事をして行きたいと思っております。